南北朝期貴族住宅の出口および乗車位置

—洞院公賢の用法—

THE EXIT AND THE RIDING PLACE IN THE ARISTOCRATIC RESIDENCE IN THE NANBOKUCYO PERIOD

—In the case of Toin-Kinkata—

飯淵 康一*

Kouichi IIBUCHI

The following results have obviously been obtained from the study on the exit and the riding place in the Residence of Toin-Kinkata.

1. The Kinkata, as the master, had mainly used Chumonro (中門廊) as an exit.
2. Kintaka used to ride in carriage at the Chumonro or outside the gate.
3. In case of riding at Chumonro, generally Utokihito (外人) did not accompany the master.
4. Utokihito is one kind of person who is contrary to the so-called Karei (家礼) and Jikkinnohito (昵近人).

keywords: aristocratic residence, master, exit, riding place

貴族住宅、主人、出口、乗車位置

序

寝殿造から書院造への変遷過程の解明に於いて、玄関の成立過程を明らかにすることが最重要課題の一つであることは言を俟たない。この玄関の成立については早くから論じられてきた。しかしながらこれらに於いては寝殿造の中門廊との関係を指摘するものはあっても¹⁾、出入口の用法の実態を明らかにしその変遷を具体的に跡づけ考究したものは見られない。

ところで大河直躬氏は近年の著作に於いて寝殿造の出入口に関し簡明に述べているが、主人の出入口は寝殿の南階であり、訪問者の出入口は中門廊であったとし²⁾主人と客の出入口が機能分化していたと見做している。³⁾

一方、「三内口決」⁴⁾には主殿に関し、

面七間之中。妻戸二有之。(一ハ公卿座ノ中也。是ハ主人ノ妻戸。仍平生ハ不開之。爲貴人等出入之路也。中門車寄此所ニ相兼テ作之。家々有之。輿等自此戸可寄候也。)其次之妻戸。平生之客人之通路也。

とあり、主人の妻戸は公卿座に設けられ、またここに作られた中門車寄が昇降に際し重視されている様子をうかがうことが出来る。

もし仮にこの様であったとすれば主人の出入口の位置は大きく変化したことになるが、その変遷過程および要因については全く不明である。

本論では、これらを解明する手はじめとして南北朝期の代表的貴族洞院公賢とその住宅中園殿をとり上げ、主人の出入口としてどこがどのように用いられていたのかを明らかにし、また本来寝殿造の中門廊には設けられなかった車寄が重視されていく過程と要因について考えてみたい。

公賢の著した「園太暦」はこの時期の様子を具体的に知るためにまず第一にあげるべき史料であり、当時の最上級貴族層の住宅の出口および乗車位置を知るのに相応しいものとなっている。なお主人としての公賢の出入に関する記録は出発に関するものがほとんどであるので、

本論は1994年6月の日本建築学会東北支部研究報告書に発表した「南北朝期貴族住宅の出口および乗車位置、洞院公賢の用法(I)、(II)」をまとめたものである。

* 東北大学工学部建築学科 助教授・工博

Assoc. Prof., Dep. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tohoku, Dr. Eng.

この場合について検討することにする。

第1章 中園殿と公賢の出口、乗車口

今日残される「園太暦」の書き始められた延慶4年(1311)当時の公賢の住宅については位置、規模ともに詳らかにすることは出来ない。しかしながら康永3年(1344)以降は中園殿に居住していた。「園太暦」康永3年(1344)11月24日条(以下、特別に断らない限りは「園太暦」からの引用とする)に、

未刻著宇治、聊駄餉、申刻赴洛、乗燭之間到著中園第了、
と記されている。中園殿は当時の院御所持明院殿の近所に存したが、⁵⁾同年(1344)正月1日条には、

予里第巳仙洞咫尺
とあるので、この年の正月には公賢はすでに中園殿を用いていたことが知られる。貞和3年(1347)6月3日には、それまで居住していた中園殿を修理もしくは建てかえし、息男実夏と共に寝殿に移徙したが、これ以降もこの地を動いた様子を認めることは出来ない。

中園殿の規模については移徙以降のものについて知ることが出来る。東面に晴門を持ち、寝殿のほか東対代、東卯酉廊、侍廊、中門廊などにより成っていた。⁶⁾移徙以前については知られない。しかしながら「園太暦」には修理もしくは建て替に際し以前のものとどの様に変ったかについての記述は特になく、また移徙後の邸の構成がほぼ同時期の寝殿造の典型的なそれであったと考えられるので、⁷⁾移徙以前に於いても対代を持つかあるいはこれをさえ欠く構成を持っていたものと考えられることにする。

さて、前にも述べたように貞和3年(1347)6月3日、公賢は息男実夏と共に移徙したが、実夏と中園殿との関係についても述べておく必要があるだろう。というのも、昇降の場所を検討するに際しては、この中園殿の主人は誰であったのかを明確にしておく必要があるからである。移徙以前と以降とに分けて見ておきたい。

移徙以前、実夏は中園殿の向屋に住んでいた。康永3年(1344)正月5日条に、

今日紋位置禮、此第室禮無便宜之間、渡春宮大夫向屋始此事

とあり、また同11月22日条にも、春宮大夫向屋の記述がある。春宮大夫とは実夏のことを指している。「園太暦」を通覧してもこの期間公賢と同居していた様子を示す記述はない。かえって方違や対面のために公賢がこの向屋を用いたことがある程である。⁸⁾

移徙以降については注意を要する。移徙に際し実夏は南階より昇り寝殿東面二間に入ったが、ここで五葉を供している。一方公賢は寝殿北面に居處を構え、ここで五葉の儀があった。実夏はこの後客座に出たが

今日爲亭主儀、仍令坐奥座予許也、

とされ、この移徙に際し亭主の役割を果たしていた。しかしながら、この時以来実夏が中園殿の主人となったのではない。実はこの移徙は

但今年予遊年在坤方、今年移住者、彼方作事、犯土不可叶云々、仍談在弘朝臣、有俊朝臣等、爲春宮大夫分

移徙儀也、予相附之凌之體也、
(渡力)

とあるように、公賢の方忌のため実夏の移徙に公賢も伴うという形式をとったのであった。この時以来、公賢と実夏は同居したようであるが、⁹⁾実際は公賢が相変わずこの邸の主人であった。上表、太相国拝賀など公賢に関する重要な儀式のほとんどがここで行われているのに対し、実夏が主体となる儀式は行われていない。また移徙の際に実夏の居所とされた寝殿東面二間は常には公賢の内出居として用いられており、¹⁰⁾実夏は権大納言に任ぜられた後、この内出居に入来し公賢と談じている。¹¹⁾また実夏は移徙以降すべての期間同居していたとも考えられない。文和4年(1355)12月27日条には、

今日節分也、去年方違事與奪大納言之處、彼卿當時移住向屋、

とあり、向屋を引きつづき用いていたことが知られる。

いずれにせよ中園殿の主人は公賢であったと見做して良い。移徙時、公賢の居所は寝殿北面に設けられたが、常にはどこが御所であったのかを知ることは出来ない。しかしながら客座、公卿座が東卯酉廊に設けられ、¹²⁾内出居が寝殿東面に設けられたことにより鑑みて寝殿内に設けられたものとみて良いだろう。

さていよいよ、公賢の出口、乗車位置について検討していきたい。表-1は中園殿に関し「園太暦」により知られる外出時の記事に関し、管見の及ぶものについて一覧表にしたものである。次章で述べる理由により、扈從あるいは同行した人物や前驅等についても併せ示してある。これら諸例のうち出口、乗車位置が知られるか或いは推定されるものの数はそれ程多くはない。これらをもとにまず出口から検討していくことにしよう。

貞和4年(1348)11月10日、公賢は太政大臣の拝賀のために参内・参院した。当日、上達部、殿上人などがこの邸に参集している。出発に際し公賢は寝殿より出て東卯酉廊の上達部座¹³⁾に著し、ここから進み対代前階を下りた。

侍渡客於殿上人事
次主人起座、出當間弘庇東行、下對代前階、於下一級著沓、(殿上人右中将守賢朝臣獻之、侍所司定景傳之、此間前驅取松明進出、列居中門南頭、雜色長取松明進參階下、)出中門東行、(前驅等猶一行、先下臈東行、沓役殿上人在主人後、雜色長在傍、)向上達部上首相揖、(致禮人退列蹲居、兩人也、)諸卿答揖、(参議揖畢、更警折、)主人到門外乗車、上臈前驅(光綱

表-1(1) 中國院に於ける公賢の外出時の記録

西暦	和暦	目的	出入口	乗車位置 中門・門外	戻・同行	前・親・色など	備考
1345	康永4.2.2	参仏閣門院				前庭 光通、光通	
	6.13	参仏閣門院			春宮大夫(東夏)	光通	・不及共人、盡々(密々々)之儀也
	8.13	参院			春宮大夫(東夏)同車		
	8.22	参院				前庭 仲康、光通	
	8.29	見物 (天竜寺・世義 武利行向)			春宮大夫(東夏)同車		
	10.11	参院(野定)				前庭 仲康、光通	
	貞和元・10.21	参院			右中守守寶	前庭 仲康、時茂 光通、桑治 雑色長	
	"	参内 (出仕)			春宮大夫(東夏)同車 守寶		
1346	貞和2.5.13	参六輪殿 (阿弥陀殿)			春宮大夫(東夏)同車	前庭 時茂 光通 雑色長	春宮大夫の共人、源成成
	5.15	参院 (御前)			春宮大夫(東夏)同車 守寶	能大夫、侍	
	5.26	参花加殿				能大夫 光通、時茂 侍 定重	公賢、奥を用いる。 教訓殿は法皇(花加殿)御所
	7.3	参花加殿				時茂、桑治 成成	公賢、奥を用いる。
	7.7	参院 (親御会)			冷泉前大納言(公案)同車 春宮大夫(東夏)同車	能大夫 侍	
	8.29	龍近衛大納言部			春宮大夫(東夏)	前庭 仲康、光通 永季 雑色長	・殿上人雖御前、面々故 仍不相料、冷然也、故爲 扇格儀
	閏9.10	参院 (御首旨召掛)			冷泉前大納言(公案)同車	能大夫 光通、永季 桑治、仲康	
	10.13	向院大寺			冷泉前大納言(公案)同車 春宮大夫(東夏)同車	光通 定重	
	11.7	参院計二品			冷泉前大納言(公案)同車 春宮大夫(東夏)同車	能大夫 光通、光通 桑治、永季	
	11.9	参院(御前)			○ (冷泉前大納言(公案)力 春宮大夫(東夏) 大納言(実守)同車力 内大臣公卿)	前庭 光通、桑氏 桑治、永季 光通 雑色長	
1347	貞和3.正.1	参院 (院御前)			○ 春宮大夫(東夏) 教訓殿、連科	前庭 光通、桑治 永季	・教訓殿連科也、非相由緒来 訪之間
	正.2	参院 (院御前)			春宮大夫(東夏)同車	前庭 仲康(仲康) 光通、永季 雑色長	・教訓朝臣相持、但由通車、 既無要、仍可参会下取旨之 旨示之、

西暦	和暦	目的	出入口	乗車位置 中門・門外	戻・同行	前・親・色など	備考
1344	康永3.正.1	参院 (院御前)	中門力	○		前庭 光通、光通 等	・御車駕 教訓、仙居で来会、基盤連参
	"	参院 (拜礼)	中門	○	殿上人二人 頭中納言(連車) 山科少輔教訓(連車)	前庭 光通、仲康 光通、桑氏 雑色長・雑色・如木	
	正.2	参院 (院御前)				前庭 仲康、光通 桑治 雑色長・重朝	基盤、教訓、院御前、 名参会仙居門外
	正.3	参院 (院御前)				前庭 光通、仲康 光通、桑氏 雑色長	同上
	正.7	参内 (白馬面会)			教訓	前庭 光通、仲康 光通、桑治 雑色長・雑色・如木	基盤連参
	正.22	参内 (除目)			春宮大夫(東夏)	前庭 仲康、桑治 雑色長 重朝	基盤は公賢の息 東夏、公賢と同車力
	正.23	参内 (除目)				前庭 光通、光通 雑色長	
	正.24	参内 (除目)				前庭 仲康、桑氏 桑治 雑色長	
	2.16	参内 (吉吉参)				前庭 光通、桑治 雑色長	・殿上人少々難経路、面々 故殿之間不相料、近來故也
	2.28	参内 (御前)			春宮大夫(東夏)、同車	前庭三人 雑色長	
	閏2.1	参院 (野定)				前庭二人	
	閏2.10	参院 (院御前)			実守 同車	前庭三人 雑色長	実守は推大納言、公賢の弟 で嫡子
	閏2.12	参院 (秘藏)			冷泉前大納言(公案)同車	前庭四人 雑色長	公案は公賢の弟
	9.3	参院 (御八講)				前庭 光通、光通 桑治 雑色長・重朝	
	9.16	参院 (天竜寺御前に 同行)			春宮大夫(東夏)、同車	能大夫 光通、仲康 時茂、光通 源成成、桑治	
	9.23	参内 (除目)				前庭 桑氏、他 雑色長	・近來面々不審、無見訪之 宴客
	10.26	参院 (野定)				前庭 光通、桑治 雑色長	
	11.22	参内・春日			実守(御前) 東夏(御馬) 冷泉前大納言(公案)力	能大夫 光通、光通 仲康、光通 光通、経賢 侍 国定 六位 源成成、康朝 紀定重、久知 御前長	

西暦	和暦	目的	出入口	登車位置 中門・門外	口・従・同行	前・廻・親・色など	備考
1347	貞和3.正.3	参院 (院御政)				前廻 仲政、光熙 親色良	
	"	参院院御政			春宮大夫 (実兄) 同車	前廻	
	正.14	参院 (院定始)				前廻 仲政、光熙 親政、永季	
	正.22	参院				前廻 仲政、永季	
	2.30	妙天意寺				膳大夫 光熙、光通 侍 良親、源成 紀定良	
	3.2	参院 (院定)				前廻 親政、永季	
	8.5	参法皇 (御園)				光熙、光通 源成良	
	8.9	指板井宮			春宮大夫 (実兄) 同車	膳大夫、侍	
	9.25	参西園寺山光院			春宮大夫 (実兄) 同車	前廻 光通、仲政、 光通、永季 前廻 光熙 親色良	
	12.15	参二院院			公家、実守同車	膳大夫 光熙、光通 侍 定良	実守は途中より同車 ・予老後良親親政源成、公家 実守同車同車之旨指示之
1348	貞和4.2.13	参北原院 (院御政山岳)				前廻 仲政、光熙 親色良	・同上人近來良親親政少々難 相持親政難之
	5.13	参北原院 (御不例)				光熙、永季 定良	
	6.8	参安樂光院 (阿弥院御)			大所召 実兄	前廻 三人	
	7.7	参院 (御建)			冷泉助大納言 (公家) 同車	前廻 四人	
	10.11	参院 (親王御元服禮礼)			春宮大夫 (実兄) 同車功	膳大夫 侍	
	10.20	参北原院				膳大夫 侍	
	11.10	参内・参院 (大相殿拜賀)	対(前席)	○	上廻部 公通、通冬、公名 公忠、実兄、実親 忠季、藤良、実材 院侍、実俊 良上人 源直、良親、実兄 守賀等	前廻膳大夫 光熙、仲政 光通、親氏 良親、行有 親政、光之 親政、光熙 光通、親政 地下御座 車廻、牛廻 仕丁、大老 親色、親色良	

朝臣)就車右開輦戸立榻、(即居抑榻候、)其人(春宮大夫)

殿上人取者給雜色長事

就車左褰簾主人乘車、(本役殿上人守賢朝臣、取沓賜
雜色長、)本役前駟(光綱朝臣、)押入裾、閉輦戸撒榻、

先参内、行列先殿上人(下臈爲先、二列、)宗重朝臣、
頭治部八條中將、白河中將、佐々木野中將、坊門中將、
長顯朝臣、實富朝臣、伊俊朝臣、守賢朝臣、信行朝臣、
綾小路中將、八條中將、右中將、一條中將、八條新中將、
敦有朝臣、公夏朝臣、親明朝臣、公村朝臣、實興朝臣、
持明院少將、滋野井少將、前兵部少輔、前平少納言、藏人右中將、
基賢朝臣、實勝朝臣、信兼、行時、教光、
藏人次官、侍從權大道、藤右衛門佐、春宮少進、清水谷少將、
時經、時光、邦茂、兼賴、公廣、
團前兵部少輔、前尾張守、大炊御門少將、藏人兵部丞、
基数、親兼、光保、藤原光豊、

次前駟笠持十二人、(二行、)次地下前駟、(下臈爲先二

牛飼持儀事

行、馬上取松明、右爲上、)次主人車、(卷簾、)
車副六人、(毎辻稱警蹕、)牛飼一人、(持榻在車右、)
仕丁一人、(持雨皮張筵、在車左、)大番一人、(持笠相
從仕丁邊、)次雜色二人、(平禮上話、亂緒垂尻、)次
雜色長右府生峯茂(平禮、白襖、差帶、)騎馬、於晴所
者下馬、取松明在雜色前、次扈從上達部、左大將、
一條南近衛前頭白、烏丸以東、院御車在
烏丸以西、其所如此、令主人已下垂車簾、三條大納言一人不下之、
(公重、)源大納言、(通冬、)大宮大納言、(公名、)
三條大納言、(公忠、)春宮大夫、別當、(實繼、)
右衛門督、(忠季、)甘露寺中納言、(藤長、)右宰相中
將、(實材、)大宮宰相(隆持、)西園寺三位中將(實俊、)
路次北大路西行、

この参内に際し上達部以下多くの人々が扈從同行した
ことが知られよう。なおこの場合の乗車位置は門外であ
った。出口が知られるこれ以外の例はすべて中門廊¹⁴⁾よ
りのものであった。2つほど例を示そう。上記の拝賀よ
り程無い12月23日、公賢は直衣始により参院してい
る。

亥刻理蓬鬢戴竹皮、近來鬢髮灑落、其構縦横、頗經時
刻、其後著直衣、(熨地綾遠文、表裏白如例、)綾粕(志
々良地、遠文白、)白單(綾、)指貫、(同直衣、但文藤
丸、)白下袴等也、不帶劔笏、(不及令持之、正安如此、)
先之殿上人三條中將公世朝臣、(馬璫帶、々劔、召具隨身
一人、此間依法皇御事廢朝・警固中也、於此亭卷纓、弓
壺借用、令持雜色也、)内蔵頭教言朝臣、(同帶也、)
并前駟等來集、予出中門廊乘車、(公世朝臣褰簾、依無
殿朝中警蹕事
外人、自門内乘之也、)先参院、前駟(光綱朝臣、仲康、
光熙、光連、永季、光之、各衣冠半靴步行也、)車副
雜色前警蹕事例
警蹕、雜色前警等令止之、被止音奏程也、…(中略)…
兩朝臣連車扈從(前駟歩行之時、殿上人連車先例也)

この場合は三條中將公世と内蔵頭教言が連車扈從した。

貞和6年(1350)正月1日には、牛車慶を奏上するため
参院したが、

已及申刻、著装束、…(中略)…及申刻欲出門之處、
持明院少將基秀朝臣可相伴也、而遲來、頻加催促、

於中門乘車、外人相伴之時於門外乘車

及酉刻入來、仍出門、車簾中門廊乘之、(外人相伴之時
不可然、於門外可駕也、)春宮大夫褰簾、即遣出、(今
日雜色・牛飼・車副皆以無単袴、車副六人、警蹕如例、)
前駟六人、(光綱朝臣・光熙朝臣・光連・永季・光之・
光豊、步行也、)前行雜色長秦峯茂、(布衣也、帶劔如
例、)其後春宮大夫車、(前駟二人、兼氏・經賢、前行、)
次基秀朝臣車、(隨身二人、紅梅袴、)

とありやはり中門廊より出、ここで乗車している。扈從
は春宮大夫実夏と持明院少將基秀がつとめた。

以上のように「園太暦」により知られる公賢の出口は
対代前階と中門廊のみで、寢殿南階の例を認めることは
出来なかった。¹⁵⁾

一方、乗車位置に着目すると表-1からも明らかなよ
うにこれらの例は2つに大別することが出来る。ひとつ
は門外で乗車するものであり、他のひとつは中門廊で乗
車するものである。前者の例として、前掲貞和4年(1348)
11月10日条があり、また貞和2年(1346)11月9日
の場合もこれにあてはまる。これらは晴門たる東門外で
乗車したものと思われる。これら以外は前掲の貞和4年
(1348)12月23日条、貞和6年(1350)正月1日条も含め
すべて中門(廊)で乗車または乗車したと推定される例であ
った。

第2章 出口および乗車位置の使い分けの要因

本章では、出口と乗車位置に何故前章で述べたような
違いが生じたのかについて考えてみたい。

まず、出口から検討したい。前に述べたように、対代
前階が用いられたのは貞和4年(1348)11月10日の太
政大臣拝賀のため参内、参院した一例のみであった。こ
の例と他との最も大きな相違点はすべてに亘って大がかり
であったことに尽きる。

当日早朝より家は内外共に清掃され、寢殿をはじめと
して建物内部は装束された。東卯酉廊に公卿座が侍廊に
は殿上人座と前駟座が設けられている。また、南庭には
幔が引かれ、中門外にもやはり幔が引かれた。他の例に
このようなことを認めることは出来ない。一方、行列に
着目すると扈從した公卿は11名に昇り、前駟としての
殿上人は実に20数名に及んだ。その他にも地下前駟な
ど多くの人々がこれに参加している。この行列に関し、
中門廊を出口として用いた場合をみると、扈從したのは
2名以下であり、前駟の数は対代前階の場合よりはるかに
少ない。その目的も、任太政大臣拝賀の一身の大事に
対し院御業や正月拝礼の年中行事や牛車の慶を奏するた
めのものであり、いずれも参院の例であった。

この様に見てきた時、これらの差が出口のちがいにあら
われたと見るのは極く自然なことであろう。即ち、対
代前階より下りるのは中門廊よりの場合に対し、外出理

由がより晴れがましい場合と考えることが出来そうである。¹⁶⁾

因に平安期の例について、花山院の場合をみると、仁安3年(1168)8月25日、忠雅は太政大臣の慶賀のために参院、参内したが¹⁷⁾西対南階より出ている。公卿座(客亭)は西対南面に、殿上人座は西又庇に設けられた。扈從した公卿は8名、殿上人は20数名、その他多くの人々が行列に参加している。また忠雅は仁安2年(1167)2月11日に任大臣儀により参内したが、¹⁸⁾この場合は西対中門廊より下りている。公卿座等は設けられていない。扈從したのも若干名であった。

中園殿は対代のみで、対屋を欠き平安期に於いては通常対南面に設けられた公卿座が東卯西廊に設けられていた。貞和4年(1348)の場合も或いは公卿座から下りるべきだったのかもしれない。

さて、次に乗車位置についてであるが、「園太暦」には興味深い記述がみられた。前章で取り上げた貞和4年(1348)12月23日条、貞和6年(1350)正月1日条を再録しよう。

余出中門廊乗車(公世朝臣褰簾、依無外人、自門内乘之也)

持明院少将基秀朝臣可相伴也、而遅來、頻加催促、及西刻入來、仍出門、車簾中門廊乘之(外人相伴之時不可然、於門外可駕也)、

即ち外出に際して「外人」が相伴する時は門外で乗車すべきであり、「外人」が居ない時には門内で乗車するというのである。このいずれの場合も公賢は中門廊より乗車しているが、この門内での乗車位置に関し、貞和4年(1348)12月17日条にはさらに具体的に記述される。

無外人之間、自中門廊駕車、

即ち「外人」が居ない(相伴しない)場合は中門廊より乗車した。

ここでいう相伴とは、前驅、雑色等の行列に常に参加する下位の者に対する語ではなく、上掲貞和6年条に基秀に関して用いられたことにみられるように、扈從、同行する公卿や殿上人に対する語と考えられ¹⁹⁾従ってこれから行おうとする「外人」の検討もこれらの範疇の中で行えば良いということになりそうであるが、しかしまた貞和4年(1348)1月10日条に出発に関してではないが、

今度人々皆兩大夫許連車、文殿前驅無外人、仍乍乘入了²⁰⁾

ともあるので、前驅をも含め考えてみることにする。

それでは「外人」とはいかなる概念なのであろうか。

²¹⁾「園太暦」には「外人」に関する具体的な記述はみられない。従って本稿では「外人」ではない人物の概念を示しながら「外人」の概念を浮き彫りにすることにしたい。主人の乗車位置を考えるにはこれらの検討がぜひ必

要なのである。

前掲諸条によれば、「外人」が相伴しない場合は中門廊より乗車するとあった。公賢が中門廊より乗車した場合に扈從、同行した公卿、殿上人は表-1により、

春宮大夫実夏
頭中将基隆
山科少将教言
三條中将公世
左少将基秀

であったことが知られる。即ちこれらの人々は「外人」とは見做されなかったことになるが、これらについて便宜上公卿と殿上人とに分けて検討を進めたい。

まず公卿についてであるが、春宮大夫実夏がこれに相当する。実夏はすでに前章で述べたように公賢の子息であった。即ち子息は「外人」の範疇には入らないということになるが、これに関し貞和2年(1346)閏9月10日条には興味深い記載がみられる。この日、院御所で百首和歌披講事があったがこの清書について、

御百首清書自筆他筆例事

抑御百首清書事、予惡筆有耻之間、可教人書之條可宜歟、然而相替可書之仁更無之、仍無力勵老筆了、且談合戸部候處、雖為何様自筆可宜候由計之也、但案先例、寛元

他人啓

院御製、(清範入道書之、)常盤井入道相國、(實二不之、非歟見自筆也、)定嗣卿、(猶子高定書之、)

文保

内大臣師信、(子息師賢書之、)有房公、(子息有忠卿書之、)經繼卿、(醫師師光吉書之、有沙汰云々、)

疊書條

此外猶有例等歟、

今度

前關白、(子息大納言書之、)關白、(松殿三位忠嗣卿、)前内府、(子息公忠卿、)實教卿、(孫實名卿、)尊氏卿、(上杉伊豆守重治、)資明卿、(他筆、)

目所勞爲定卿、(侍從爲重、)隆教卿、(隆朝卿書之、)

老懶條

直義卿、(上杉彈正少弼朝定、)

及數輩、不知先規、所勞并至極老者無力、自由人々如何、就中隆朝卿書自詠、又書父卿歌、先規雖不審、文保有忠卿可摸歟、但太不穩便哉、子姓中聊可書之人有之者、尤可誅外人太不可然哉、

去夜御百披講無爲被仰下事、(下線筆者)

と記される。即ち、子姓のうち、清書すべき者があるならば「外人」をこれにあてるのははなはだよろしくないというわけである。ここに於いて「外人」は子姓と対比させ用いられている。公賢は今回の隆朝卿が父の隆教卿の、文保年間の有忠卿が父の有房公の代わりに歌を清書した例をあげているが、さらに先例により子息、猶子がこれにあたった場合のあったことを知ることが出来る。

ところで「園太暦」には、致礼または家礼という語が散見される。公賢の致礼または家礼として、実夏、実守、公泰、忠季、実治をあげることが出来る。前4者については、康永3年(1344)2月28日条に、

次冷泉前大納言(直衣、和琴)洞院大納言(同、拍子)

春宮大夫(束帶、笙)左宰相中将(同)廻北面著端座(件四人為予致禮、仍不著一々也)

とあって、致礼と呼ばれていた。冷泉前大納言とは公泰を指し、洞院大納言は実守、春宮大夫は実夏、左宰相中将は忠季のことを指している。また、実夏については康永4年(1345)10月21日条に

先之、實夏卿依家禮退了

とあり家礼とも呼ばれたことが知られるが、忠季については、貞和4年(1348)11月10日条に

致禮之人、大夫・右衛門督、起座蹲居

とありまた、同時に

自巻簾、子息以下家禮輩來此處

ともされる。右衛門督は権中納言正親町忠季でありまた大夫とは、春宮大夫実夏を指している。子息とは実夏のことであるのは言を俟たない。即ち忠季も家礼と呼ばれていた。文和2年(1353)5月19日条には実治に関しても以下のような記載がみられた。

秉燭之間三條大納言送消息、實治卿薨去事示之、凡不便言詞難及、今年六十二歟、自年少為予猶子、致家禮了、

さて、再三繰り返すように実夏は公賢の息であった。また実守は公賢の弟であったが、「尊卑分脉」に

為舎兄公賢公子依父公命也

とされるように公賢の猶子でもあったことが知られ、²²⁾ 公泰も公賢の弟であった。忠季についてみれば、公賢とこの様な関係は無い。しかしながら、貞和5年(1349)正月2日条に

忠季與予、父子儀也、仍起居禮如實子

とされる。また実治は上掲条にみるように公賢の猶子であった。従って公賢にとっての致礼または家礼²³⁾とは、公賢と父子または父子儀あるいは公泰のように血縁上極めて近い関係にあった人物と考えることが出来る。またこの家礼については、貞和3年(1347)12月21日条に、

子孫家禮

とも見えるので公賢直系をも含む概念と考えられる。

平山敏治郎氏によれば、²⁴⁾鎌倉時代末ごろの家礼について、すなわち家礼なるものは、公事の法式故実を習わんがために、摂家方へ親しく付き随い朝夕出入して勤仕するばかりでなく、御恩地の沙汰を蒙ることによって奉公を致すものであった。これはいわゆる封建的な主従関係の一種型であったことがわかる”としている。公賢の家礼が、公賢に対しこの様な関係にあったかどうかは全

く不明であるが、いずれにせよこの家礼は「外人」を考える上で極めて重要な概念であることに疑いはなく、家礼は「外人」の範疇には入っていなかったものと考えられる。

さて次に殿上人すなわち基隆、教言、公世、基秀について考えてみたい。基隆²⁵⁾は園を名乗り教言は山科、公世は三條をそれぞれ名乗っている。また基秀は基隆の孫であり、いずれも公賢の洞院家と直接的な関係はなく、家司ともなっていない。これらの人々と公賢とはいかなる関係にあったのであろうか。その前に次の点についてぜひ述べておく必要があるだろう。

貴人の外出あるいは帰宅に際し扈從、同行する人物のうちのある者が、乗下車の際貴人の沓を取り、また車の簾を褰ぐ役割を果たした。基隆に関しては、康永3年(1344)正月1日条に知る事が出来る。この日公賢は、院御所に参じた後帰宅したが

予即歸宅了、乗車之間、頭中将褰簾

とされる。頭中将とは基隆のことである。また、公世については前掲貞和4年(1348)12月23日条に

公世朝臣褰簾

とあり、沓については「輿車圖考」²⁶⁾に

康永二四廿沓公世裾實富朝臣也

とある。²⁷⁾基秀についても「園太暦」貞和6年(1350)正月1日条に

基秀朝臣又取沓也

と記されている。即ち、基隆、公世、基秀のいずれもが沓を取り、あるいは車の簾を褰ぐ役割を果たしていた。この役割について貞和3年(1347)正月1日条には

今日沓并簾役皆前驅也、殿上人昵近輩相伴之時者役之とあり、本来は殿上人昵近輩がこの役を果たすことが記されている。²⁸⁾

この昵近輩について、貞和4年(1348)2月13日条には、上皇、女院の御幸に関し、

幸御聽聞所、又乍屋形奉昇入御車寄妻戸内、少時下御、昇出御輿也、公蔭卿・忠季卿等、依女院由緒昵近、懃如此細々事也、

とあり、公蔭と忠季が女院にとっての由緒昵近人であったことが知られる。また同年11月10日の公賢の太相國拝賀の条には

賜親昵人(右衛門督、正安権中納言實明)

とあり、右衛門督すなわち忠季と実明は公賢の親昵人であったことが知られるが、この忠季は康永3年(1344)正月1日条に

忠季卿當時叔父大納言入道(実明)猶子儀也、故入道大相國圓光院以來有由緒、

と記されるように、公賢にとって古くから由緒のある人物であった。またこの忠季は前に述べたように公賢の家礼でもあった。

このように見てきた時、昵近輩(人)とは由緒のある人々と考えることが出来よう。²⁹⁾

三條中山口伝³⁰⁾には、一乗車儀事として

褰簾人 子息役之。若無子息。前驅上臈役之。

下車儀 立榻人(前驅第二人役之。子息取沓者。第一人立之。)取沓人(同第一人。有子息者必取之。)

取裾人(取沓人便取之。)

とあり、沓、簾の役について本来は子息の役と記している。基隆、公世、基秀以外で公賢に対しこの役を果たした人物として、実夏³¹⁾、守賢³²⁾、保脩³³⁾をあげることが出来る。

このように見てきた時、昵近人もやはり「外人」とは対立した概念であったということが知られよう。

以上のように基隆、公世、基秀については公賢の昵近輩という点に於いて共通していた。しかしながら教言については事情が異なっている。教言はしばしば公賢に扈從したが、貞和3年(1347)正月1日の参院の条には次のように記されていた。一部重複するが再び引用してみよう。

今日沓并簾役皆前驅也、殿上人昵近輩相伴之時者役之、教言疎遠者也、非指由緒、來訪之間如此事加斟酌也、即ち教言は昵近輩に対し疎遠者と見做されている。翌正月2日、公賢は再び参院したが、

又教言朝臣相伴、但咫尺連車、頗無要、仍可參會下車所之旨示之、仍來會也、

とあり、公賢は教言に対し車を連ねて相伴するに及ばず院御所の前(公賢の下車する所)で参会すれば良いと指示した。教言は山科実教を祖とし公賢と血縁上の直接的な継りはなくまた、家司でもない。「圖太曆」を通覧しても公賢と特別の関係を見出すことは出来なかった。しかしながら公賢はまたこの教言に対し、貞和4年(1348)12月17日条に於いて、

又教言朝臣可相伴也、遅々之間遣使了、半時許之後入來、即出門、無外人之間、自中門廊駕車、

とするように、「外人」とは見做していなかった。上掲貞和3年(1347)正月1日条にも記されるように公賢の外出に際し幾度か來訪し、相伴した教言に対し公賢は敢えて外人とは見做さなかったものと考えざるを得ないであろう。³⁴⁾

以上のように、中門廊より乗車した場合をとり上げ、扈從、同行した公卿・殿上人に着目し、「外人」の概念を浮き彫りにしようと試みてきた。子姓、致礼・家礼あるいは昵近人は「外人」の範疇には属していないと言うことが出来るだろう。

ここで前驅についても一瞥しておきたい。公賢が中門廊より乗車あるいは乗車したと推定される場合の前驅として光熙、光連、光遠、仲康、兼氏、業治、永季、光綱、経賢、光之、光豊が知られるが、これらは前の考察によ

り「外人」と見做すことは出来ない。これらのほとんどは諸大夫³⁵⁾であり、このうち、光熙、光連、光遠、仲康、兼氏、永季は公賢の家司³⁶⁾でもあった。諸大夫は権門につかえその保護を受けるものとされている。³⁷⁾また門外で乗車した場合の前驅についてみると、当然上記の者も含まれているが、それ以外として長経、行有、懷衡、光春、知景、仲頼(顯)をあげることができる。これらのうち少くとも前4者はやはり諸大夫であった。³⁸⁾即ち、いずれの場合に於いても前驅は公賢にとって「外人」ではなかったものと考えて良いだろう。

さて以上の検討は中門廊より乗車した場合、即ち「外人」が扈從、同行しない場合をもとにしているが次に、表-1により、門外で乗車した場合すなわち「外人」が扈從、同行したと考えられる場合をとり上げ上述してきた観点からさらに検討し考えてみたい。

前章で紹介した貞和4年(1348)11月10日の太政大臣拝賀の条は門外で乗車した例である。この場合表-1にも示されるように多くの上達部、殿上人が扈從、同行した。この中には、上達部では春宮大夫実夏や右衛門督忠季のような家礼(致礼人)や、殿上人では守賢のような昵近人も居たがそれ以外は「外人」と考えられる。例えば左大将大納言公重は西園寺公経を祖とし、公賢と血縁上の継りは無く、家礼または昵近人であったとする記述を見出すことも出来なかった。権大納言通冬は源を名乗りまた同様家礼、昵近人であった徴は無い。

このような背景のもとで公賢は門外で乗車したのであろう。

貞和2年(1346)11月9日公賢は和歌集の撰歌の竟宴の儀により参院した。

扈從殿上人公世朝臣(退出之時伴之、)領状、相待之間、及戌刻猶不見、仍且出門、(予車八葉長物見、々々開之、懸藍革五緒小簾、内方懸之也、不卷之、常鞞差綱、車副四人遣之、警蹕如例也、)此間大納言實守來會、即令乗車後、内府來臨、未乘、仍予於門外乗車也、(革緒劍入之、下車之後、前驅上臈持之也、)前驅五人、(光熙兼氏・業治・永季・光盛、已上衣冠・半靴、)雜色長秦峯茂(掲衣及狩衣、菊閉黄衣、用單、帶劍、)等在共、大納言実守が來會し、同乗したが内大臣公清は來臨したものの乗車せず、従って公賢は門外で乗車したとあるが門外で乗車しているので「外人」が扈從、同行した例と考えられる。ここで実守と公清が対比的に記されている点に注目したい。実守は前にも述べたように公賢の弟であり、猶子でもあり家礼と呼ばれていた。従って、公賢にとって「外人」と考えることは出来ない。一方公清は公賢の女婿³⁹⁾ではあったものの徳大寺を名乗り実能の子孫であり洞院流ではない。このような事情のもとで公清は「外人」として振舞ったのであろうか。そのため公賢は門外で乗車したのであろう。⁴⁰⁾

さて、ここで再び表-1をみると乗車位置の不明な例のほとんどが扈從・同行した公卿、殿上人の点よりみると、家礼(致礼)または昵近人で占められていたのがわかるであろう。また、前駆についてみても、極めて多くの例が前に示した家司および中門廊で乗車した際のの前駆により占められているのが知られるであろう。

即ち、表-1に示したほとんどの例で公賢は中門廊より乗車したということになる。

結

「園太暦」をもとに中園殿の公賢に焦点をあて、外出時の主人の出口、乗車位置について考えてきた。

「園太暦」により知られる主人の出口は中門廊がほとんどであり対代前階が用いられたのは1例のみであった。これは他と比べ外出理由がより晴れがましい場合と考えられる。乗車位置は門外と中門廊との2つに分けることが出来る。門外での乗車に対し中門廊より乗車する場合は原則として「外人」が扈從、同行しない場合であった。公卿、殿上人について言えば家礼等、子、兄弟など血縁上極めて近いつながり又は、それに擬された人々や公賢と由緒を結んだ昵近人は「外人」の範疇には属していない。これらをもとに乗車位置が記されない他の例について推定すると、公賢の場合の扈從・同行はこれら家礼、昵近人によって占められており従ってほとんどの例が中門廊より乗車したものと思われる。極く特殊な即ち極め

て晴れがましい場合を除き普段の外出には中門廊が乗車口として用いられたと考えて良いだろう。

康永3年(1344)2月16日条に

殿上人少々雖相誘、面々故障之間不相伴、近来法也とされるように、この時期殿上人が扈從しない例も増えてきている。殿上人が扈從しないということは、それだけ「外人」の参加の可能性が減る事を意味し、このことも中門廊よりの乗車に拍車をかけたものと思われる。

さて、本論では南北朝期の貴族を扱ったが、実は平安期およびそれ以降の主人の出入口の実態は必ずしも明らかにされているわけではない。例えば大河直躬氏が主人の出入口として寝殿南階とし、春日権現験記の寝殿南階よりの乗車の図を示しているが、⁴¹⁾前に花山院の例に見たようにこれが必ずしも平安期に於ける実態を示しているとは言えない。

即ち公賢の時代にかけてどの様にして中門廊が主人の出入口として重視されるようになったのか全く明らかにされていないのである。これらについては今後の課題としたい。

付記

「園太暦」の解釈については東北大学文学部の羽下徳彦教授、白根靖大助手に大変お世話になった。末筆ながらここに記し謝意を表したい。

註

- 1) 藤原義一：書院造の研究、高桐書院、昭和21年、太田博太郎：書院造、東京大学出版会、1966年、太田静六：寝殿造の研究、吉川弘文館、昭和62年、等の玄関に関する部分があげられる。
- 2) 大河直躬：住まいの人類学、1986.9平凡社
- 3) 本稿では南北朝期を扱ったが平安期の貴族の昇降の実態については別稿で考えたい。大河氏の理解は必ずしも当を得ていない。
- 4) 群書類従第27輯、16世紀の成立と考えられている。但し、主人の妻戸は平生は不開之、とある。平生の主人の出入口は別の箇所には設けられていたのか不明であり、今後検討すべきであるが、ここでは文字通り主人の妻戸は公卿座に設けられていたと考えておくことにする。なお割註については()で示す。
- 5) 山城名勝志 巻二(改定史籍集覧22)に中園殿(洞院公賢公の第也、持明院殿、東北歟…)とあり、また川上貢氏は「日本中世住宅の研究」(墨水書房刊、昭和42年10月)に於いて持明院殿の北方に存したとみている。
- 6) 「園太暦」貞和4年(1348)11月10日条。
- 7) 常盤井殿、持明院殿、一條室町殿、など(川上貢前掲書参照)。
- 8) 方違については上記、康永3年(1344)11月22日条、対面については貞和元年(1345)10月18日条。
- 9) 「園太暦」貞和4年(1348)12月8日条、入夜大夫歸来。

貞和5年(1349)2月26日条、今日春宮大夫依召参院、爲御使歸来、觀応元年(1350)2月27日条、寅下剋歸宅、春宮大夫同車也、など。

- 10) 中園殿の出居については、拙稿：寝殿造における「出居」、「公卿座」について、日本建築学会論文報告集、第343号、昭和59年9月、参照。
- 11) 「園太暦」貞和3年(1347)9月16日条。
- 12) 註10の拙稿参照。
- 13) 中園殿では東卯酉廊が上達部座にあてられている。東卯酉廊南面三箇間卷翠簾、座上妻戸覆翠簾如例、(不敷弘筵、不立屏風、奥障子不覆翠簾例也、)奥端二行敷高麗端疊五枚、(西第一間端不敷之、硯脇息撤之、)
- 14) 中門と記される場合と中門廊と記される場合とがあったが、ここでは一応中門廊とし、一括して扱っておく。
- 15) 「園太暦」と同時代の重要な記録として「師守記」があげられるが、ここには公賢の昇降に関する記述はみられない。また同時期の他の記録からも知ることは出来なかった。本稿表-1、康永3(1344)11.22について、この日公賢は宇治に着き酉刻に春日社に参じた。この日は他の場合と異なり輿を用いたとあるが、出口の位置は知られない。平安期についてみると、春日詣の場合、出口として対あるいは寝殿の南階が用いられている。従って、公賢の場合も寝殿南階が用いられた可能性はある。しかしながら詳しくは後述するが、扈

- 従した公卿についてみると実守(公賢弟)、実夏(公賢息)、公泰(公賢弟)の身内の人々のみであり、彼らはいずれも「外人」ではなかった。平安期に於ける春日詣は藤氏長者の儀式として位置づけられ非常に多くの公卿、殿上人らが扈從同行したが、公賢は氏長者ではない。この様な点を鑑みると、中門廊より降りた可能性も考えられる。もし仮に南階が用いられたとしても、中園殿に於いては実質的に中門廊が重視されていたという論旨に大きな影響は無い。
- 16) 本論では出口のちがいに、これ以上のことを言うことは出来ない。中世期の他の記録を検討しても同様詳細にすることは出来ない。これらについては別に平安期について検討するなかでさらに明らかにしていくつもりである。
- 17) 「兵範記」同日条。
- 18) 「山槐記」同日条。
- 19) 公卿については例えば、康永3年(1344)3月22日条の内大臣実忠の拝賀に関し、大納言公清が扈從したが、次公清以下乗車、扈從如常、春宮大夫殿自路次被遣連車許云々、公清兩三町相伴了、とあり、また殿上人については同年2月16日条に、殿上人少々雖相誘、面々故障之間不相伴、とある。また、公賢は貞和5年(1349)12月26日に即位に伴い参内し退出したが、春宮大夫、右衛門督、保脩朝臣(未脱甲、依爲陣家、相伴不可然事歟)等相伴如初、前驅等如先、とあり相伴としての春宮大夫等と前驅とを分けている。
- 20) 「大日本史料」による。史料纂集本には、今度人々皆兩大夫許、連車文殿、前驅無外人仍乍乗入了、とある。
- 21) 国史の分野でも「外人」に関する研究はなされていないようである。これに関係するものとして「家礼」についての研究がみられるが(平山敏治郎：日本中世家族の研究、法政大学出版局、1980年4月)、「外人」については知られない。
- 22) 「公卿補任」嘉暦3年(1328)の条に実守について、父大納言右大将公賢卿(實者故左大臣実泰公四男)とあり、この時にはすでに公賢の養子となっていたことが知られる。
- 23) 家礼は主人の外出に扈從し、庭上では蹲居して敬意を表すのを常とした[前掲、貞和4年(1348)11月10日条他]。実守も公賢に対し蹲居の礼を採っている[康永3年(1344)正月23日条、同2月21日条]。なお、註20)の平山氏の著書に於いては、「致礼」と「家礼」とを特に区別はしていない。
- 24) 註21参照
- 25) 但、基隆は康永3年(1344)7月29日には参議となっている。
- 26) 新訂増補故實叢書
- 27) 「続史愚抄」によれば、公賢はこの日奏殿し、著陣している。
- 28) 「後愚昧記」応安3年同4年内大臣故実文書には、御簾役人事、親昵之中、可為上首、雖為公卿、為子息者勲仕之、御沓役人事、是又親昵之中、殿上人可勲仕之、所詮簾役ヨリハ下臈人役也、とある。いずれにせよこれらの役は親昵人が果たしたことが知られる。
- 29) ちなみに基隆についてみると、基隆の母は公賢の妾(但し、高群逸枝氏によれば嫡妻)の妹にあたり、また公賢の母と基隆の母は叔母、姪の關係にある(以上尊卑分脉より)。このようなことも關係して公賢との由緒が生じたとも考えられる。公賢は外出に際し屢々、基隆の車を借用している。貞和5年(1349)6月2日条によれば基隆の住まいは公賢家の隣であった。
- 30) 続群書類従
- 31) 貞和6年(1350)正月1日条。
- 32) 貞和4年(1348)11月10日条。源守賢、爲守男。
- 33) 貞和5年(1349)12月26日条。持明院保脩。保有男。保脩は貞和4年(1348)12月20日の公賢の孫の元服で理髪をつとめ、翌年9月9日の菊九首歌詠に公賢の弟公敏、公泰、息実夏と共に参加している。
- 34) 子姓、致礼、家礼、昵近人以外で「外人」の範疇に属さないものがあり、これに教言が含まれていた可能性も考えられるが、今回「圓太曆」からは公賢との特別の關係を見出すことは出来なかった。これらに関しては今後の課題としたい。教言が致礼、家礼あるいは昵近輩でもないのになぜ相伴したのかについては、当時の最高の貴族であった公賢に対し關係を持ちたいという意志のあらわれのためと考えることは出来ないであろうか。
- 35) 康永3年(1344)11月22日条、貞和2年(1346)閏9月10日条、貞和4年(1348)12月20日条、光豊は貞和2年(1346)正月2日条に蔵人と記されている。
- 36) 貞和5年(1346)12月26日条、貞和2年(1346)正月6日条、康永3年(1344)9月23日条、康永3年(1344)正月25日条、康永3年(1344)9月23日条、観応元年(1350)正月29日条
- 37) 石田祐一：諸大夫と摂関家、日本歴史392号、1981、1月。この中で氏は平安末と鎌倉時代の諸大夫を取り上げ考察しているが、この状態がつづくことにより、諸大夫は権門に仕える家来であるという位置付けが固まり、室町時代には、「九条殿諸大夫、一条殿諸大夫、久我諸大夫」の如く表現されるようになる”としている。
- 38) 貞和4年(1348)11月10日条、同12月20日条
- 39) 「尊卑分脉」
- 40) 「後愚昧記」貞治2年(1363)正月1日条によれば、洞院実夏は拝賀の出立所として日野時光亭を用いているが、これは実夏の息公定が時光の女婿である由緒によるという。この点よりみると、公清は公賢にとって由緒のある人物ということになる。本文に引用した貞和2年(1346)11月9日条によると、公賢は公清が乗車(同車)するのを期待した風であり、当初必ずしも「外人」とは見なしていなかったようであるが、公清の動きをみて「外人」が相伴する場合の方式をとったのであろうか。表-1によれば、貞和2年以前で公清が公賢と同行した例は無く今回が初めてである。このような点もあるいは影響したのかもしれない。
- 41) 大河直躬：住まいの人類学、前掲

(1994年11月10日原稿受理、1995年3月22日採用決定)